

性、転移性の鑑別はシンチグラムのみからでは困難がありました。2. ほとんどは fibrosis と思われますが、一部腫瘍の残存も関与するかと思います。

*

9. 肝シンチグラムにおける肝門部周辺欠損像のよみについて

山田光雄 島崎 昭

(岐阜市山田病院)

放金コロイドによる肝シンチグラムにおいて肝門部の欠損像はしばしば経験するが、これの判読は非常に困難である。われわれが経験した欠損像の数例について、胆管造影、血管造影、BSP シンチ、手術、剖検等の裏付けにより解説した。その原因は胆のう、胆管の拡大、癌の転移等色々であった。また昨年10月より本年5月迄に放金シンチを行なった604例中87例に肝門部の欠損像を認めたが全体の14.4%である。その内容は肝炎56例、11.7%，肝硬変12例、25%，肝臓癌12例、60%，胆道炎5例29.4%，肝囊胞1例であった。陰影欠損の型から分けると、小半円型のもの、肝臓癌で4例、肝硬変で4例、肝炎で26例、その他2例、計36例であり、大半円型のもの肝臓癌4例、肝硬変3例、肝炎5例、その他2例、計14例、クロバー状のもの、肝臓癌4例、肝硬変2例、肝炎10例、その他2例、計18例であり、三角状のもの、肝炎のみ5例、帶状のもの肝硬変3例、肝炎10例、その他1例であった。またこれ等の例の肝機能検査は蛋白量は正常が大部分、モ値は正常が多く、GOT、GPT、もほぼ半数が正常、ただコバルト反応は肝硬変で全て右側反応、カドミウム反応は肝臓癌で12例中10例が左側反応を呈し、正常の2例も経過中肝シンチを行なった時のみ正常で、その前後は左側反応を呈した。また脾の出現は87例中80例の高率にみられたが背椎の出現は20例のみにみられた。以上より放金コロイドによる肝シンチグラムの肝門部欠損像のよみは他の種々の検査を併せ行なうことにより確実となり、このつみかさねにより次第に正確なよみが、可能になると思われる。

質問：西岡清春(岐阜大学 放射線科) 肝門部欠損像のメカニズムにはどんなものがありますか。

答：山田光雄(山田病院) 1) 胆のうの腫大、肝の縮少により胆管の割合が大となると大きな陰影欠損のごとくみえる。2) 胆管の拡大、炎症、胆石や腫瘍により肝門部付近の大きな胆管に閉塞が起るとその末梢の胆管が拡大して大きな陰影欠損を生ずる。3) 肝門部にお

ける腫瘍の転移。4) 肝の右葉と左葉の境界が陰影欠損のごとくにみえる。5) 肝門部における囊胞。6) その他血管系の拡大等の原因もあるがその症例は経験がない。

質問：川村耕造(川村消化器科、内科) 肝炎の症例で、肝門部陰影欠損の頻度が多いが、その原因は何か？

答：山田光男(山田病院) 肝炎は478例中56例の陰影欠損を生じ、症例は多いが割合は11.7%で肝癌、肝硬変、胆道炎に比し少ない。その原因は左葉の腫大または萎縮、胆管の拡大等いろいろ考えられるが確定的なことは目下のところ不明である。またこの肝炎の中には、いくらか肝硬変の症例も入っていると思われる。

追加：今枝孟義(岐阜大学 放射線科) 肝炎の場合、相対的に左葉の肥大を認めるために肝門部があたかも欠損のごとく影く呈するのではないかと思う。

*

10. 肝シンチグラムにおける単発性欠損像の読み

今枝孟義 仙田宏平
(岐阜大学 放射線科)

金コロイドによる1038症例からスキャン上単発性の欠損像を呈した症例を選び、その内病理組織学的に肝癌であることが認められた97症例について、シンチグラムだけから原発性か転移性かを鑑別しえないものかどうかを調べた。東芝製3inch scanner を用いバックグラウンドの cut off は5%以下、ほとんどの症例が direct の条件で施行した。肝癌97例中原発性19例(内肝硬変を合併せるもの9例)、転移性78例(内肝硬変を合併せるもの4例)で、これらの88%に alk. p-ase の上昇を認めたことは良性腫瘍との鑑別点の1つと思われる。肝硬変を合併しない原発性と続発性とでは脾、骨髄影の出現度に明らかな差を認め、原発性の80%に脾、骨髄影を共に認めないのでに対して転移性ではわずか5.7%であった。しかし肝硬変を合併している症例では脾、骨髄影からでは鑑別は困難のように思われる。だが肝硬変から発生した原発性は、その形態から鑑別が可能である。右葉のみに単発性欠損像を認める場合、原発性9例中7例に左葉の代償性肥大(肉眼的にクルミ大以上の限局性病変を認めない)をみ、転移性では、左葉が大きくなることはなく、もし大きくなれば左葉にも転移巣があると考えてよい結果であった。しかし、肝硬変に原発性を伴った症例では左葉の肥大は目立ない。左葉から右葉に及ぶ欠損